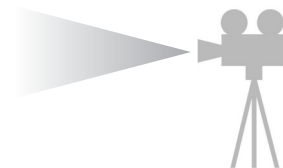




映画とその時代 ④



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

JR東京駅の丸の内駅舎がようやく修復を終え、戦災前の全貌を取り戻した。大内山の緑を真正面に見据えた赤レンガ3層、両翼335メートルに及ぶその威容は、周辺に乱立する無機質、無個性の高層群を圧倒する風格をもっている。この駅舎の完成は1914年。(大正)という時代の幕明けを象徴する巨大建築だった。

西欧文明の模倣と吸収に没頭した明治時代は、いわば鹿鳴館というシンボルで始まっている。そしてひたすら(坂上の雲)を目指した苦難の歳月を経て、ようやく独立国の自負と気概をもちえた。この歴史的な巨大建築は、その高揚感の象徴でもあり、さらに新しい時代の到来を予感させる(かたち)でもあったろう。

ところがこの大正時代はわずか15年。激動の現代史のなかでは何とも影が薄い。近頃のレトロブームで昭和へのノスタルジーは盛り上がっているが、もはや(大正)は遠すぎる過去になったようだ。

しかし、この国の社会や文化にとって、いわば(大正)は小春日和のようなひとときだったのではないか。国家という(公)の重すぎた明治が終わり、ようやく陽射しを受けた(個)や(私)の世界が、自らの言葉で語り始め、自らの美意識を追い求めるようになった。たとえば谷崎潤一郎や永

井荷風の文学はその象徴のひとつだろう。だが、間もなく昭和に変わり、恐慌と戦禍が続くなかで、この国のエートスは再び成熟から遠ざかってしまう。

この東の間の時代は、どんな空気が流れ、どんな色合いをもっていたのか。

1960年の映画『おとうと』は、そんな(大正)をスクリーンに焼きつけた作品だ。監督は市川崑。『東京オリンピック』や『ビルマの堅琴』を残した名匠だが、その並外れた映像へのこだわりで知られている。原作は文豪幸田露伴の娘の文。その幸田家の家族をモデルに、(個)と(個)の微妙なふれ合いを描いたものだが、何よりもその色調がユニークの極みだ。この監督は(色のない色)を求めたという。さまざまな(物)がそれぞれの色を主張したら、(時代)という大きな色合いを見失ってしまう。そして、カラーフィルムを白黒の照明で撮り、現像の途中で発色を止める独自の方法を見出したという。一見ほとんどモノクロに近いが、深く沈んだ微細な色感のなかに、大正末期の日本家屋のたたずまいや巷の風俗が浮かび上がる。この監督は、その多感な少年期をもった(大正)に格別な思い入れがあったに違いない。そしてその比類ない美意識が、(大正)そのものを映像世界に創り出したといえる。—————